

公表

## 児童発達支援事業所における自己評価総括表

○事業所名	ぐんぐんPOE		
○保護者評価実施期間	2025年 12月 24日		2026年 1月 31日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	34	(回答者数) 23
○従業者評価実施期間	2026年 1月 22日		2026年 2月 6日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	16	(回答者数) 15
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 2月 26日		

## ○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	きこえない・きこえにくい子どもたちの特性に合わせ、手話言語を軸としたコミュニケーションを保障している。視覚的に情報を受け取ることができる「デフスペース」の整備や、関わりを大切にす支援を通して、安心して理解・参加できる環境を継続して整えている。	室内の案内表示や当日のスタッフ・利用者情報を、写真やイラストを活用して視覚的にわかりやすく掲示。子どもが自ら表現したり選んだりできるような関わり工夫。「伝えたい」「わかりたい」という意欲を引き出す場面設定の工夫。	写真カードや実物を使った視覚的選択肢の充実を進め、子どもが理解できる環境の提供を目指す。あそびを通して、考え、伝える力を育む活動を充実させ、自己表現の場を拡げる。スタッフの手話言語力の向上を図り、ロールモデルとの関わりを増やし、子どもの可能性を引き出す関わりと質の向上を実現する。
2	子どもが安心してプログラムや活動に集中できるよう、支援中もスタッフ間での情報共有と役割分担に加えフォローし合う体制を整備。	日々の定期的なミーティングを通じて支援内容のすり合わせを行い、スタッフ間での情報共有を大切にしている。支援中も記録の共有や声掛けを意識的に行い、状況に応じた柔軟なフォロー体制を維持している。また、プログラム中のスタッフの動きについても見直しを行い、プログラムを円滑に実施できる体制づくりに努めている。	個人情報の取り扱いに十分留意しながら、必要な情報を適切に共有できる仕組みを整備する。あわせて、プログラム中の役割分担や動きの整理を進め、スタッフ間の連携をより円滑にし、支援の質の向上を目指す。
3	NPOこめっこの連携を継続し、支援体制の充実を図っている。専門的な支援や情報共有を通じて、きこえない・きこえにくい子どもたちへの支援の質を高めるとともに、保護者に対しても手話習得の機会を設けるなど、子どもを取り巻く環境全体への支援を行っている。	NPOこめっこの連携を通じて、保護者支援にもつなげた支援体制の強化を図っている。子どもたちの成長に応じた支援方法を意識的に取り入れるとともに、円滑な情報交換やNPOこめっこの研修を活用し、スタッフの支援の質の向上および家庭も含めた支援体制の継続に努めている。	NPOこめっこの連携をさらに深めながら、定期的な情報共有の機会を設け、支援の質を高めていく。また、保護者への手話習得支援などの充実を図り、家庭とともに子どもを支える体制を強化していく。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	地域との交流や、障害のない子どもたちと一緒に活動する機会を全く作れていない状況。	子ども一人ひとりの特性や安心・安全を最優先に事業所運営を整えてきたため、外部との交流や発信については慎重な姿勢を取ってきたことが要因と考えている。	子どもたちの支援を最優先にしながら、無理のない形で社会への聴覚障害児支援の理解や認知につながる取り組みを検討していく。あわせて、関係機関との交流機会を広げるとともに、聴覚障害児を受け入れている他事業所との交流も継続し、支援の質の向上を目指す。
2	子どもへの直接支援に関する共有や連携はできているものの、事業所の仕組みや運営面についての理解が不十分であり、スタッフ内の理解度の差が生じている状況。	スタッフそれぞれの勤務状況により、全体で仕組みを共有する場を持つことが難しく、事業所運営に対する認識にばらつきが出ていることが課題と捉えている。	定期的なミーティングの機会を確保するとともに、事業所運営に関して共有できる研修を実施し、子どもの支援について共に考え、振り返る機会を設けることで、スタッフ間の共通理解を深めていく。
3	活動概要や行事予定について、専用システムや公式LINEを通じた個別発信は行っているものの、ホームページなどを活用した広報や情報公開が十分にできていない状況。	個人情報保護への配慮が必要なため、広く情報を発信する方法の整備が進んでいないことが課題の要因と考えている。	個人情報保護に配慮しながら、広報の在り方について検討を進めるとともに、手話の魅力や子どもたちの生き生きとした様子を伝えられる工夫を取り入れていきたい。